

<翻訳>

シノド本『系譜の書』（Родословная книга）におけるノガイ＝オルダ系譜

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-06-27 キーワード (Ja): キーワード (En): Nogay, Mangit, The Golden Horde (Kipchak Khanate), Tatar, Edige (Edig) 作成者: 赤坂, 恒明 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/282

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



翻訳

シノド本『系譜の書』(Родословная книга)におけるノガイ=オルダ系譜 The Genealogy of Nogayskaya Orda in *Rodoslovnaya kniga* (Sinod text)

赤坂恒明訳

AKASAKA, Tsuneaki

モンゴル帝国の西北部を構成したジュチ・ウルス *ulūs-i jūcī* (チンギス・ハンの長男ジュチ *joči* の^{ウルス}くに)は、キプチャク草原——現在のカザフスタンから黒海北岸に至る広大な草原地帯——とその周辺諸地域を支配して強勢を誇ったが、15世紀以降、いくつかの地方政権に分裂した。それらの諸政権のうち、「ノガイ=オルダ *Ногайская Орда*¹⁾」は、マンegt *mangγud*~*mangγit* 族のエディゲ *edigü beg* (1419年歿)の子孫によって統治され、カスピ海北岸からアラル海北岸に至る草原地帯とその周辺諸地域(主に、現在のカザフスタン西部方面)を17世紀に至るまで支配した。

マンegt族は、チンギス・ハンの族祖と父方につながる父系同族集団の一つであるとされる(ラシードッディーン『集史』*rašīd al-dīn, jāmi‘ al-tawārīx* 他)が、チンギス・ハンの男系子孫ではなかったエディゲと彼の継承者たちは、「ハン *xān / qan*」ではなく「ビー *biy* (ベク *beg*)」の称号を採った。

チンギス・ハンの血統を重視するキプチャク草原の遊牧民の間では、非チンギス裔のマンegt族はカリスマ性に欠け、求心力が強くなかった。かくて彼らは、チンギス裔と婚姻関係を結び、チンギス裔のハンを擁立または支持し、ジュチ・ウルス分裂後、めまぐるしく諸勢力が興亡を繰り返すキプチャク草原において、無視し得ぬ重要な歴史的な役割を果たすこととなった。

このマンegt族の活動は、中央アジア南部においてチャガタイ汗国分裂期に勃興した、チムール朝のバルラス *barulas* 族、モグーリスターン汗国(東チャガタイ汗国)のドグラト *duγulat* 族——いずれもチンギス・ハンの父系同族集団とされていた(ラシ-

ドッディーン『集史』他)——と類似点が多く、モンゴル帝国解体後の内陸ユーラシア地域における社会変容を考察する上でも、重要な意義を持つものと考えられよう。

さて、このマンegt族のエディゲ裔に統治された遊牧民集団は「ノガイ=オルダ」として知られているが、「ノガイ *noγay*」という語の語源がモンゴル語の「犬 *noqai*」であることに疑いの余地はない。しかし、「ノガイ」が集団名として使用されるようになった歴史経緯は、現在に至るまで未詳のままである。

ジュチ・ウルス史上、「ノカイ(ノガイ)」という固有名詞は、13世紀後半のキプチャク草原西部において権勢を振るったジュチ裔王族の名として、我々に記憶される。この人名「ノカイ(ノガイ)」を集団名「ノガイ」の起源とする見解があるが、王族ノカイは、ジュチの七男ボアル *bo‘al* の孫で、ジュチ・ウルスの「右翼」に属し(ラシードッディーン『集史』)、その本拠地は、キプチャク草原の最西端、ドノウ川河口方面にあった。それに対し、「ノガイ=オルダ」は、ジュチ・ウルスの「左翼」に属したジュチの十三男トカ=テムル *toqa-temür* の子孫のうちのノムカン *nūmuqān* 裔——後のアストラハン王家、すなわち小ムハンマド裔——との関係が深く、本来の根拠地はヴォルガ川以東の地であったと考えられる。よって、従来の通説に従う限り、王族ノカイとノガイ=オルダとの間に接点を見出すことは困難であった。

しかし、両者に名称上の関係があると推定することは決して不可能ではないと考えられる。それは、モンゴル帝国期のジュチ・ウルスが、バト *batu* (ジュ

キーワード: ノガイ、マンegt、金帳汗国(キプチャク汗国)、タタール、エディゲ

Key words: Nogay, Mangit, The Golden Horde (Kipchak Khanate), Tatar, Edige (Edigü)

チの二男）の中央、オルダ orda（ジュチの長男）の左翼、タングト tangyud（ジュチの六男）の右翼、の下位三ウルスから構成されていたとする、私が提唱した説²に基づくものである。

通説では、ジュチ・ウルスは、ジュチの没後、バトの右翼とオルダの左翼との下位二ウルスに両分された、とされており、王族ノカイが属したジュチ・ウルスの「右翼」とは、バトのウルスとなる。一方、私見では、ジュチ・ウルスの右翼には、ジュチの諸子のうち少なくとも六男タングト、七男ボアル、十男チンバイ ċimbai と彼らの子孫が属しており、バトの西征でジュチ・ウルスの領域が拡大する以前の右翼の本拠地は、カスピ海とアラル海の間——「ノガイ=オルダ」の領域と重なる部分が多い——にあった（赤坂恒明 2005, pp.128-136,210-211）。そして、ジュチ・ウルス右翼の当主の地位は、タングトの後、チンバイ裔に移ったが、王族ノカイが実力で彼らを凌駕し、右翼の実質上の支配者となった結果、右翼のウルスは「ノカイの国々」と認識されていた（赤坂恒明 2005, p.108）と考えられる。ジュチ家宗主トクタ toqto'a との争いに敗れた王族ノカイの没後、右翼は解体されたようである（赤坂恒明 2005, pp.175-191,211）が、右翼の構成要素の後身は、その後も史料上に姿を現し³、それらのうちチンバイ裔のチンバイ集団は、ノガイ=オルダの系統を引くカラカルバク qara-qalpaq 人の氏・部族の一つとなったと推測される⁴。

ここから、「ノカイの国々」の構成要素が、マンガト族のエディゲ裔の政権に合流したという背景のもとに、マンガト族が「ノガイ=オルダ」と呼称された、と考えることが可能であると思われる⁵。

さて、本稿で取り上げる、「ナガイのオルダの始まり、およびナガイの公たちとムルザたちの系譜」は、『ロシア歴史・古代帝室モスクワ協会紀要』第10号（*Временник Императорского Московского общества истории и древностей российских* книга десятая. 1851）стр.130 所収、シノド本『系譜の書』（*Родословная книга*）〔Государственный исторический музей, синодальное собрание, No.860〕の一章で、ロシア系譜史料に伝えられた、「タタール系譜」と称さ

れるモンゴル系王族・貴族の系譜⁶のうち、ノガイ=オルダ即ちマンガト族のエディゲの子孫に関する系譜情報の一つである⁷。

本系譜には、記載された人物の続柄が記されていない部分があるが、それらは、転写の際における脱落によると考えられる。

それらの脱落を考慮しても、本系譜におけるエディゲ裔に関する情報は網羅的であるとは言いがたい、ノガイ=オルダの有力者の中にも記載されていない人物が少なくない⁸。本系譜には三人の女性——いずれもチンギス裔の君主・皇子に嫁いだ女性たちである——が挙げられており、注目に値するが、有名なカザン汗国皇后スユム=ビケ sūyum bika / Сююмбике（ユースフ [1-1-1-5] の娘）の名前は、ここには見えない。

重要人物が本系譜に見えない理由の一つとしては、本系譜の原形の下限が、エディゲの子ヌールッディーン [1-1] の子孫は曾孫まで、エディゲの子マンスール [1-2] の子孫は玄孫までであり、その後、個別に系譜情報が追加されたものの、その追加に洩れた著名人がいたためである、と推定される。即ち、本系譜では、ヌールッディーン裔は、曾孫の代までは、おそらく兄弟順に従って排列され、マンスール裔の前に位置している。ところが、ヌールッディーンの子孫の系譜は、マンスール裔の後に記載されており、新たに追加された情報であることが窺われる。

また、マンスールの玄孫より以下の代で記載されているのは、外裔であるカザン汗サファー=ギレイ [1-2-1-1-1-a-1]、および、ロシア正教に入信したイワン [1-2-1-2-4-1-1]、その兄弟シヂャク [1-2-1-2-4-1-2]（サイイダク）とその諸子であるが、彼らの系譜情報も、本系譜の原形が成立した後に追加された新情報であると思われる。モスクワにとって手強い敵対者であったサファー=ギレイ・ハンの外祖に関する系譜情報は、モスクワ側にも関心があったために加えられたものであろうし、また、ロシア正教に入信したイワンと彼の兄弟・甥については、イワン本人または彼の周辺から系譜情報が伝わったものであろう。

ちなみに、このイワンの兄弟でプハラに居るとさ

れるシデヤク（サイイダク）と彼の諸子についての記載は注目に値する。周知のように、シャイバーニー朝のもとにはアストラハン王家のジャーン jān 一門——後にジャーン朝（アストラハン朝）を開いた——もあったが、彼らサイイダク一族も、恐らくシャイバーニー朝に仕えていたと考えられる。中央アジアで編纂された諸史料から、彼ら一門の動向を明らかにすることが出来れば、それによって、あるいは、ブハラにおけるマングト族の「ブハラ・アミール国」成立前史の一齣を明らかにすることができるかも知れない。

ところで、本史料における「Князь (князь)」は、「公」と訳したが、これは、「ビー biy (ベク beg)」に対応していると考えられる。但し、各人に付けられた称号「Князь」・「Мурза (Murza)」の使い分けについては、検討が必要であると思われる。

いずれにせよ、本系譜に記載されているエディゲ裔の各人の中には、ノガイ=オルダを対象とする先行諸研究において、まだ比定されていないものも少なくない。よって、他史料との比較をも伴った今後の更なる検討が俟たれる。

本訳稿でも、人名比定が必ずしも十分ではない。御指正いただければ幸いである。

*1 ノガイ=オルダに関する先行研究は、V.V.トレパヴロフ『ノガイ=オルダの歴史』(Trepavlov 2001)等、ロシアを中心に数多く存在するが、日本における専論としては、坂井弘紀氏による、「ノガイ大系」と称される英雄叙事詩を主に分析した一連の研究(坂井弘紀 2003; 2008; 2010; 2012; 2013)があるに過ぎない。

*2 当該の説に対する評価としては、岡本和也 2006 を参照されたい。

*3 例えば、「シャイバーニー朝」初期のチャガタイ=テュルク語史料、『勝利の書なる選ばれたる諸史』*tawārīx-i guzīda [-i] nuṣrat nāma* (1504年頃撰筆)には、ジュチの五男シパンの後裔であるアブル=ハイル・ハン *abū al-xayr xān* の軍に加わった人々が所属していた諸集団のうちに、「タングト *tankqut*」・「ボアル *būāl*」・「チンバイ *jimbāy*」の集団名が挙げられているが、これらは、モンゴル帝国期にジュチ・ウルスの右翼を構成していたと私が推定するジュチ

諸子の名前に由来すると考えられる。赤坂恒明 2005, pp.102-104 を参照されたい。

*4 現在のウズベキスタン共和国の北部を構成するカラカルパクスタン共和国の都市には、カラカルパクの氏・部族名に由来するものが少なくなく(バルトリド 2011, p.248を見よ)、工業都市チンバイ *Čimbāy / Šimbay* の名もチンバイ集団に由来すると考えられるが、検討が必要である。

*5 なお、ノガイ=オルダとの関係が密接であったジュチ裔政権「カザン汗国」の遺民であるカザン=タタール人は、帝政ロシア時代、商人として中央アジア方面で活躍し、西トルキスタンの住民から「ノガイ人」と呼ばれていたことが知られる。この名称については、「カザン汗国」など所謂「タタール三汗国」に及ぼしたノガイ=オルダの影響力の強さを、その歴史背景として指摘することが可能であろう。「ノガイ」の族称については、今後、更なる検討が必要であると思われる。

*6 「タタール系譜」については、Vásáry 2008、赤坂恒明 2013 と、それらに引用された諸文献を参照されたい。

*7 所謂「タタール系譜」におけるノガイ系譜としては、本史料の他に、モスクワのロシア国立古記録文書館(Российский государственный архив древних актов [РГАДА])の外務省(Министерство иностранных дел [МИД])旧収集物における「ノガイ=オルダの系譜」*Род Ногайской Орды* (РГАДА, ф.181 《Рукописное собрание библиотеки Московского городского архива МИД》. ед. хр.385, 1706-18)がある(Vásáry 2008, p.371)が、未見である。

*8 ちなみに、ロシアの大貴族であるユスポフ Юсупов 公爵家、ウルソフ Урусов 公爵家のそれぞれの系譜の起点たるべき人物も、本系譜には記されていない。

文献

V・V・バルトリド『トルキスタン文化史』1(東洋文庫805)小松久男監訳. 東京, 平凡社, 2011.2.

岡本和也〔書評〕「赤坂恒明『ジュチ裔諸政権史の研究』風間書房, 2005年, ii+548+191頁, 定価25,200円」『オリエント』第48巻第2号, 2006, pp.186-193.

坂井弘紀「オルマンバトとその時代 一口頭伝承に現れるノガイ=オルダの有力者について」黒田卓・高倉浩樹・塩谷昌史編『中央ユーラシアにおける民族文化と歴史像』（東北アジア研究センター叢書 第13号）. 仙台, 東北大学東北アジア研究センター, 2003.9, pp.47-61.

坂井弘紀「ノガイ・オルダの創始者エディゲの生涯」『和光大学表現学部紀要』第8号, 2008.3, pp.31-49.

坂井弘紀「15世紀のノガイ・オルダ」『和光大学表現学部紀要』10号, 2010.3, pp.043-059.

坂井弘紀「16世紀のノガイ・オルダ(1) オラク、ママイとその時代」『和光大学表現学部紀要』12号, 2012.3, pp.060-080.

坂井弘紀「16世紀のノガイ=オルダ(2) カラサイ、カジとアディルに焦点をあてて」『和光大学表現学部紀要』13号, 2013.3, pp.052-070.

Трєпавлов 2001 : Трєпавлов Вадим Винцєлович, *История Ногайской Орды*. Москва, Издательская фирма «Восточная литература» РАН, 2001.

István Vásáry, “The Tatar ruling houses in Russian genealogical sources”. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, Volume 61, Number 3, Budapest, Akadémiai Kiadó, 2008.9, pp.365-372.

赤坂恒明『ジユチ裔諸政権史の研究』東京, 風間書房, 2005.2.

赤坂恒明「シノド本『系譜の書』（Родословная книга）におけるチンギス裔系譜」『埼玉学園大学紀要』人間学部篇 第十三号, 2013.12, pp.273-280.

凡例

- ・上段に中世ロシア語テキスト、下段に日本語訳を配し、末尾に、人物に関する簡単な注を付けた。
- ・中世ロシア語テキストが活字化された際、新たに句読点が付けられたが、なかには不適切なものもあるので、句読点にはこだわらずに訳出した。また、大文字と小文字にも、必ずしもこだわることなく、訳出した。
- ・【 】内にはページ数を、[]内には人物の整理番号と訳の補足を記した。末尾における各人に対する注は、この整理番号順に排列されている。

・キリル文字のラテン文字転写において、非ロシア語語彙における、子音に続く「ы」「я」「ю」は、それぞれ「i」「ä」「ü」と転写した。

テキストと日本語訳

【стр.130】

Начало Орды Нагайской, и родословіе Княземъ и Мурзамъ Нагайскимъ

ナガイのオルダ Orda Nagayskaya の始まり、およびナガイの公たちとムルザたちの系譜

Магнитъ① сильный Едигей Князь Нагайской;

マンギト Magnit (Mangit)。

ナガイの強力なるエディゲイ公 sil'niy Edigey knyaz' Nagayskoy [1] .

а у Едигея Князя дѣти:

そして、エディゲイ公 Edigey knyaz' [1] には諸子[がいた]。

Мурадинъ Мурза, да Мансырь Князь;

ムラディン・ムルザ Muradin murza [1-1]、および、マンスール公 Mansir knyaz' [1-2]。

а у Мурадина Мурзы дѣти:

そして、ムラディン・ムルザ Muradin murza [1-1] には諸子[がいた]。

Оказъ Князь;

オカズ公 Okaz knyaz' [1-1-1]。

Оказовъ сынъ Муса Князь, да Ямьгурчей мурза, да Алсанъ Князь;

オカズ Okaz [1-1-1] の子息は、

ムーサー公 Musa knyaz' [1-1-1-1]。

および、ヤムグルチェイ・ムルザ Yamgurčey murza [1-1-1-2]。

および、アルサン公 Alsan knyaz' [1-1-1-3]。

а Мусинъ сынъ большой Шегей Князь, убить въ Астрахани,

そして、ムーサー Musa [1-1-1-1] の長男シェゲイ公 Šegey knyaz' [1-1-1-1-1] ②。アストラハン Astraxan' で殺[され]た。

да Идякъ Князь, да Шихъ Мамай Мурза, да Дороу Мурза, да Исупъ Мурза;

および、イヂャク公 Idäk knyaz' [1-1-1-1-2]。

および、シフ=ママイ・ムルザ Šix Mamay murza [1-1-1-1-3]。

および、ドロウ・ムルザ Dorou murza [1-1-1-1-4]。

および、イスブ・ムルザ Isup murza [1-1-1-1-5]。

а у Ямгурчѣя дѣти:

そして、ヤムグルチェイ Yamgurčey [1-1-1-2] には諸子 [がいた]。

Урастла Мурза, да Агишь Мурза, да Кугушь Мурза;

ウラストラ・ムルザ Urastla murza [1-1-1-2-1]。

および、アギシュ・ムルザ Ağiš murza [1-1-1-2-2]。

および、クグシュ・ムルザ Kuguš murza [1-1-1-2-3]。

а Мансрѣвъ сынъ Тенсубуй Князь, да Темиръ Князь, былъ со Ахматомъ на Угрѣ;

そして、マンスール Mansir [1-2] の子息は、

テンスブイ公 Tensubuy knyaz' [1-2-1]。

および、テミル公 Temir knyaz' [1-2-2]。[彼は]

ウグラ Ugra にてアフマト Axmat と共にあった。

а у Тень-Субуя сынъ

そして、テンスブイ Ten-Subuy [1-2-1] には子息[がいた]。

Азикій Князь, да Абреимъ Князь, да Момалай Мурза, да Ахметинъ Мурза бездѣтень;

アズイキイ公 Azikiy knyaz' [1-2-1-1]。

および、アブレイム公 Abreim knyaz' [1-2-1-2]。

および、モマライ・ムルザ Momalay murza [1-2-1-3]。

および、アフメティン・ムルザ Axmetin murza [1-2-1-4]。子なし。

а у Азика сынъ Мусака Мурза,

そして、アズイク Azik [1-2-1-1] には子息[がいた]。
ムーサカ・ムルザ Musaka Murza [1-2-1-1-1]。

а у Мусеки дочь была Ждаишь Салтана,

а была за Фити Гиреемъ Царемъ за Менгли Гиреевымъ сыномъ,

そして、ムーセカ Museka [1-2-1-1-1] には娘[がいた]。[彼女は]ジダイシユ・サルタナ Ždaiš saltana [1-2-1-1-a] であった。

そして、[彼女は]、メングリ=ギレイ Mengli girey の子、フィティ=ギレイ皇帝 Fiti girey tsar'④と結婚していた。

сынъ ея Сафа Гирей Царь Казанской;

彼女の子は、カザンのサファー=ギレイ皇帝 Safa girey tsar' Kazanskoy [1-2-1-1-a-1]。

а у Зимаметя сынъ Телешъ Мурза бездѣтень;

そして、ズイマメティ Zimamet' [1-2-1-1-2] には子息[がいた]。テレシユ・ムルザ Teleš murza [1-2-1-1-2-1]。子なし。

а у Бреима Князя большой сынъ Утешъ Князь,

そして、[ア]ブレイム公 Breim knyaz' bolšoy [1-2-1-2] には長男③[がいた]。ウテシユ公 Uteš knyaz' [1-2-1-2-1]。

да Салтъшь бездѣтень,

および、サルトイシユ Saltiš [1-2-1-2-2]。子なし。

да Бибей Мурза, а во крещеніи имя ему Владимиръ,

および、ビベイ・ムルザ Bibey murza [1-2-1-2-3]。

そして、彼には洗礼名でヴラディメル Vladimer。

да Тивкушь,

および、ティヴクシュ Tivkuš [1-2-1-2-4]。

да Исаипъ Мурза,

および、イサイブ・ムルザ Isaip murza [1-2-1-2-5]。

да двѣ дочери:

および、二息女。

Бурнаша за Шибанскимъ Царевичемъ была,
 ブルナシャ Burnaša [1-2-1-2-a]。[彼女は] シバン
 皇子 Šibanskiy tsarevič と[結婚して]いた。

да Шасалтана была за Шиговлеяромъ Царевичемъ;
 および、シャーサルタナ Šasaltana [1-2-1-2-b] は、
 シゴヴレヤル皇子 Šigovleyar tsarevič [1-2-1-2-b] と
 [結婚して]いた。

a Утешовъ сынъ Нехошъ;
 そして、ウテシユ Uteš [1-2-1-2-1] の子息はネホ
 シユ Nexoš。

a у Бибія Мурзы сынъ Доаслія, а во крещеніи имя ему
 Семіонъ,
 そして、ビビイ・ムルザ Bibiy murza [1-2-1-2-3] に
 は子息[がいた]。ドアスリヤ Doasliya [1-2-1-2-3-1]。
 そして、彼には洗礼名でセミヨーン Semion。

a у Тевкиша сынъ Мавлешъ,
 そして、テヴキシユ Tevkiš [1-2-1-2-4] には子息[が
 いた]。マヴレシユ Mavleš [1-2-1-2-4-1]。

a Мавлешовъ сынъ Иванъ новокрещонъ, и Шидякъ въ
 Бухаръхъ;
 そして、マヴレシユ Mavleš [1-2-1-2-4-1] の子息は、
 イワン Ivan [1-2-1-2-4-1-1]。受洗したばかり[で
 ある]。
 そして、シダヤク Šidäk [1-2-1-2-4-1-2]。プハラ
 Vuxara に[いる]。

a дѣти его: Тарахматъ Мурза, Тога Мурза, Магамедъ
 Мурза, Июндюкъ Мурза, Чемишъ Мурза, Атай Мурза -
 Ашигимъ,
 そして、彼の諸子。

タラフマト・ムルザ Taraxmat murza [1-2-1-2-4-1-
 2-1]

トガ・ムルザ Toga murza [1-2-1-2-4-1-2-2]

マガメド・ムルザ Magamed murza [1-2-1-2-4-1-2-3]

イユндеュク・ムルザ Iyundük murza [1-2-1-2-4-

1-2-4]

チェミシユ・ムルザ Čemiš murza [1-2-1-2-4-1-2-5]

アタイ・ムルザ Atay murza [1-2-1-2-4-1-2-6]

アシギム Ašigim [1-2-1-2-4-1-2-7]

A Шихъ Мамаевы дѣти: Касамъ Мурза, Ханъ Мурза
 бездѣтень, Бай Мурза, Бій Мурза, Бекъ Мурза, Акъ
 Мурза。

そして、シフ=ママイ Šix Mamay [1-1-1-1-3] の諸子。

カサム・ムルザ Kasam murza [1-1-1-1-3-1]。

ハン・ムルザ Han murza [1-1-1-1-3-2]。子なし。

バイ・ムルザ Bay murza [1-1-1-1-3-3]

ビー・ムルザ Biy murza [1-1-1-1-3-4]

ベク・ムルザ Bek murza [1-1-1-1-3-5]

アク・ムルザ Ak murza [1-1-1-1-3-6]

A Кушумовы дѣти: Карнамалей Мурза, Ярославъ
 Мурза, Урусъ Мурза, Торга Мурза。

そして、クシユム Kušum [1-1-1-1-(4)] の諸子。

カルナマレイ・ムルザ Karnamaley murza [1-1-1-1-
 (4)-1]。

ヤロслан・ムルザ Yaroslan murza [1-1-1-1-(4)-2]。

ウルス・ムルザ Urus murza [1-1-1-1-(4)-3]。

トルガ・ムルザ Torga murza [1-1-1-1-(4)-4]。

A Юсуфовы дѣти: Юнусъ Мурза, Али Акранъ Мурза,
 Борамъ Мурза, Янъ Мурза, Ахметъ Мурза。

そして、ユースフ Yūsuf [1-1-1-1-5] の諸子。

ユースス・ムルザ Yūnus murza [1-1-1-1-5-1]。

アリー・アクラン・ムルザ Ali Akran murza [1-1-1-
 1-5-2]。

ボラム・ムルザ Boram murza [1-1-1-1-5-3]。

ヤーン・ムルザ Yan murza [1-1-1-1-5-4]。

アフメト・ムルザ Axmet murza [1-1-1-1-5-3]。

A Исмаилевы дѣти: Магаметъ Мурза, Тена Ахматъ
 Мурза, Кулбай Мурза, Тень Бай Мурза。

そして、イスマイル Ismail [1-1-1-1-(6)] の諸子。

マガメト・ムルザ Magamet murza [1-1-1-1-(6)-1]。

テナ=アフマト・ムルザ Tena Axmat murza [1-1-1-
 1-(6)-2]。

クルバイ・ムルザ Kulbay murza [1-1-1-1-(6)-3]。

テン=バイ・ムルザ Ten Bay murza [1-1-1-1-(6)-4]。

A Урузлы Мурзы Шигимовы дѣти Аиса Мурза, Тетарь Мурза, Темирь Мурза, Безезякъ Мурза, Булатъ Мурза.

そして、シギムの子ウルズラ・ムルザ Uruzla murza Šigimov [1-1-1-1-1] には諸子 [がいた]。

アイサ・ムルザ Aisa murza [1-1-1-1-1-1]。

テタル・ムルザ Tetar murza [1-1-1-1-1-2]。

テミル・ムルザ Temir murza [1-1-1-1-1-3]。

ベゼズャク・ムルザ Bezezäk murza [1-1-1-1-1-4]。

ブラト・ムルザ Bulat murza [1-1-1-1-1-5]。

注

① 「Мангитъ」とあるべきもの。

② 「ムーサーの子息、大シエゲイ公 bol'soy Šegey knyaz'」とも解釈可能。

③ 「大[ア]ブレिम公 Breim knyaz' bol'soy には子息」とも解釈可能。

1-1. スールッディーン nūr al-dīn。通説では、ノガイ=オルダの初代君主として位置づけられる。

1-1-1. ワッカス waqqāš bīk。シバン裔のアブル=ハイル・ハンを支持した有力者。ワッカスによって、アブル=ハイル・ハンは、「二回、サイン【バト】の王座 (sāyīn taxtī) を取る」(tawārīx-i guzīda [-i] nušrat nāma) ことができたという。

1-1-1-1-1. シャイフ=ムハンマド šayx muḥammad / シヒム Шихим / シギム Шигим。

1-1-1-1-1-1. オラズ=アリー Ураз-Али に比定される。Тревлов 2001, стр.145-146。

1-1-1-1-2. 「シヂャク Шидякъ (Šidäk)」とあるべきものであろう。即ち、サイイダク sayyidak / サイイド=アフマド sayyid aḥmad。

1-1-1-1-3. シャイフ=ママイ šayx mamay。坂井弘紀 2012 にも言及がある。

1-1-1-1-(4)。本史料に続柄は記されていないが、本史料の排列順から、彼はシャイフ=ママイ [1-1-1-1-3] とユースフ [1-1-1-1-5] との間の兄弟であると考えられ、その場合、前記のドロウ・ムルザ [1-1-1-1-4] は、このクシムに比定される。なお、クシム (ハージー=ムハンマド ḥājī muḥammad) がムー

サーの子であった事実は他の文献からも裏付けられる。

1-1-1-1-(4)-2. アルスラン arslan。

1-1-1-1-(6)。イスマイル ismā'īl。本史料に続柄は記されていないが、本史料の排列順から、彼はユースフ [1-1-1-1-5] の弟であったと考えられる。なお、イスマイルがムーサーの子であった事実は他の文献からも裏付けられる。坂井弘紀 2012; 2013 にも言及がある。

1-1-1-1-(6)-2. ディーン=アフマド dīn aḥmad。

「ノガイ大系」の英雄叙事詩に現れるオルマンベトの父にあたる。

1-1-1-1-(6)-3. クトル=バイ (qutlu bay)。

1-1-1-1-(6)-4. ディーン=バイ dīn bay。

1-1-1-2. ヤムグルチ yamḡūrčī。

1-1-1-2-1. オラズ=アリー Ураз-Али。

1-1-1-2-2. またはアグシュ Агъш。 「ノガイ大系」の英雄叙事詩にも登場する (坂井弘紀 2010, pp.054-055)。

1-1-1-3. ハサン ḥasan に比定される。

1-2. maṅšūr。後に、その子孫でクリミア汗国に合流した人々に率いられた集団は、「マンスール・ノガイ」として知られ、クリミア汗国における有力な遊牧勢力となった。

1-2-1. ディーン=スーフィー dīn šūfī。

1-2-1-1. ハージー=アフマド ḥājī aḥmad / ハージケ ḥājīkā。1502年にクリミア汗メングリ=ギレイ・ハンが所謂「大帳」政権を滅ぼした後、クリミア汗国に属した。

1-2-1-1-1-a. Тревлов 2001, стр.183 に「Джелал-султан (ロシア諸史料の Ждимм または Ядимм Саггана)」とある。

1-2-1-1-1-a-1. カザン汗国の汗、サファー=ギレイ šafā kirāy。クリミア汗メングリ=ギレイ・ハンの皇子フェトフ=ギレイ・スルターン fatḥ kirāy sulṭān の子。

1-2-1-2. イブラーヒーム ibrahīm。

1-2-1-2-a. その夫「シバン皇子」とは、封地としてゴロデツ Городец を与えられた「シバン皇子アフドヴレト (Шибанский царевич Ахдовлет)」即ちアク=ダウラト aq dawlat (テュメン汗国のイバク・ハ

ン ibāq xān の従兄弟アク=クルト āq qūrt の子) に比定されよう。

1-2-1-2-b. シャー=スルターナ śāh sulṭāna。その夫、シゴヴレヤル皇子は、カシモフ汗となったシャイフ=アウリヤール šayx awliyār。その子、シャー=アリー śāh ‘alī とジャーン=アリー jān ‘alī は、それぞれカザン汗になった。

1-2-1-2-4-1-2-7. あるいは、「a, Шигимъ」(そして、シギム) と解すべきものか。

1-2-2. テムル temür。小ムハンマド裔諸政権、即ち、所謂「大帳」^{オルダ}と「アストラハン汗国」を支持。本史料にも記されているように、ウグラ河畔の対陣——モスクワを攻撃するために出征した「大帳」^{オルダ}のアフマド・ハン aḥmad xān が、ウグラ河畔でモスクワ軍と対峙したが、戦戈を交えることなく退却した。この事件は、通説的に、所謂「タタールの軛」からロシアが解放された事件として位置づけられているが、この歴史評価については問題が少なくない——に、アフマド・ハンと共に参加した。なお、シバン裔のアブル=ハイル・ハン政権が崩壊した後、アブル=ハイル・ハンの孫ムハンマド(シャイバーニー・ハン)とその兄弟マフムードは、アストラハン汗カースィム qāsīm xān に引き渡され、テムル manḳyūt tīmūr bīk に預けられ (*tawārīx-i guzīda* [-i] *nuṣrat nāma*)、しばらくの間、カースィム・ハンとテムルのもとに庇護されていた。ちなみに、アストラハン汗カースィムは、シャイバーニー・ハンから、『五族譜』(*šū‘ab-i pañjāna*) の写本として唯一知られているトブカブ=サライ図書館写本 (MS., İstanbul, Topkapı-Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Ahmet III 2934) を贈られた、と考えられている (A. Zeki Velidi Togan, "The Composition of the History of the Mongols by Rashīd al-dīn". *Central Asiatic Journal*, vol.VII, Nr.1. 1962, pp.68-69)